

宮崎県延岡市で牧師をしていた時、知り合った詩人、本多寿氏が、新作詩集『魔の刻』を贈ってくれた。「詩集 * 魔の刻 * 葉」の言葉に感激したので、全文を転載したい。

くよくよく考えてみると、世界は絶えず危機に瀕してきた。車のシリンダー内でピストンが上死点と下死点を往復するように、文明もまた上死点と下死点の間を往復してきたと思っている。そして、古来、幾度となく滅亡と興隆を繰り返してきた文明は現在、下死点に限りなく近づいている。勿論、地球自体の生命周期もあると思うが、加速させているのは抑制の利かない人間の所業である。

民族紛争、宗教紛争、環境汚染、一向に減速しない核開発、グローバル経済による貧富の格差の拡大と人種差別の深刻化。かたて加えて新型コロナが世界に蔓延している。

このような、一朝一夕には解決できない問題が山積する世界に生きていると、不意に絶望を兆すことがある。そこで死の誘惑を振り払い、生の岸辺に踏みとどまるためには、いちど絶望と対峙するしかない。絶望を伴侶として、徒勞を覚悟で言葉（愛）を紡ぐしかない。 2021年晩秋）

本多氏は、現代世界の理不尽と不条理を見つめている。この視点は、誰もが共有しているのではない。現在、最も深刻なのは温暖化問題であろう。人間も体温が2度上がれば、体を正常に保てない。地球も2度上昇すれば、異常になることは容易に想像できる。世界の至る所で洪水と干ばつが襲い、規模が大きいため対処の仕方がない状態である。気候変動は生態系を壊し、作物も取れなくなり、食糧不足は目の前に迫っている。イギリスのグラスゴーで、COP26が開催され、討議されているが、本気度は見えない。非参加国はなおさらである。スウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんは、15歳の若さで、温暖化に激しく抗議していたが、COP26会議の欺瞞性を、再度、鋭く指摘している。

米中関係の緊迫化が、軍拡競争を加速させている。中国は原子爆弾を千個も作ると予想されているそうだが、米口は5000発以上、保有している。人間否定の原爆を莫大な費用をかけて大量に造り、維持するためにも大金をつぎ込んでいる。北朝鮮では、国民が飢餓状態なのに、原爆とミサイルの製造に躍起になっている。大国も軍備拡大で、国民生活が脅かされている。日本の軍拡も、国民無視になって行くのではない。愚かとしか言いようがない。シリアの内戦は10年続き、犠牲者は40万人に及ぶ。ミャンマー、エチオピアは戦火の下で、国民の悲劇はいかばかりか。中国の他民族同化政策は身勝手に、残酷である。力を誇示し、力で支配する政治から脱却しないと、平和は実現できない。

新自由主義は経済を活性化させたが、未曾有の貧富の格差を生み出し、自分の心を維持できなくなり、社会の荒廃は止まることがなくなっている。亡くなった私の友人が、「人類は滅亡する」と虚無的に言っていた言葉を想い出す。

本多氏は、この時代の絶望に真正面から向き合い、その中で、無駄を承知で、愛の言葉を見いだしていこうと訴えている。石牟礼道子氏の「まだ、絶望が足りないのでしょうか」と言われた言葉を思い出す。絶望が希望を生み出すと逆説的に述べている。

パウロは「あなたがたの間で宣べ伝えた神の子イエス・キリストは『然り』と同時に『否』となったような方ではありません。この方においては、『然り』だけが実現したのです（IIコリント1:19）」と書いている。キリストは十字架の絶望のどん底から「わが神、わが神」と叫んで、神のリアリティを信じ抜かれた。キリストが約束した「然り」の光が、「否」の暗黒を越えて行く道しるべとなろう。